

宗教改革 500 周年記念と展覧会

——ローカル・エキシビションとナショナル・エキシビション——

塚 本 栄美子

は じ め に

「1517 年、ルターが「95 か条の提題」をヴィッテンベルクの城教会の扉に貼り出した」とされる出来事⁽¹⁾から 2017 年で 500 年の歳月が流れた。この年、10 月 31 日の宗教改革記念日は全ドイツの祝日とされた。このことは、特別な意味をもつ。というのも、例年であればブランデンブルク州、メクレンブルク＝フォアポンメルン州、ザクセン州、ザクセン＝アンハルト州、テューリンゲン州の、プロテスタントが比較的多いとされる 5 州のみで祝日とされていたからである。

遠く日本にいと、世界史的な出来事とされる宗教改革のアニバーサリーがドイツ全土で祝われることは自明のことに思われる。しかしながら、1960 年代以降のトルコ系住民の定着や 2015 年のシリア難民の大量流入といった指摘を待つまでもなく、2013 年時点で、ドイツの総人口に占めるキリスト教徒の割合は 61.6% であり、プロテスタント系の教会が所属する「ドイツ福音主義教会」（以下、EKD）のメンバーに限定すれば 28.5% にしか過ぎない⁽²⁾。少なくとも 3 分の 1 の住民にとっては、キリスト教は自らの信条やバックボーンとは何の関係もないのである。そうした国家において、大々的に宗教改革 500 周年を祝う意味とは何だったのだろうか。

この問いについて、百周年、200 周年、300 周年、400 周年といった、これまでのアニバーサリーには未だ有効な宣伝手段ではなかった展覧会という手段に注目して考えてみたい。なかでも注目すべきは、2017 年にベルリン、ヴァルトブルク、ヴィッテンベルクの 3 か所で同時開催された、Nationale Sonderausstellungen である。ごちない日本語になるが、「国家規模の特別展」「連邦政府主催の特別展」とでもいうべき展覧会である。筆者は、2017 年 9 月初旬に、このうちの 2 つ、ベルリンの特別展とヴィッテンベルクの特別展を訪れる機会を得た。時間の関係上、ヴァルトブルクの特別展には足を運ぶことができなかったのも、この展覧会の紹介は公式カタログによる。

なお、ルターの宗教改革 500 周年を記念したイベントやシンポジウムは、ドイツばかり



図1 2017年10月31日宗教改革記念日にヴィッテンベルクで開催された祝賀式典に参加する、ドイツ連邦共和国首相アンゲラ・メルケル⁽⁷⁾

でなく日本でも数多く行われた。キリスト教関係者の手によるものはもちろん、歴史家たちによるものも少なくない。慶應義塾大学で行われた、シンポジウム「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義-500周年に寄せて-」⁽³⁾や、雑誌『思想』の「特集 宗教改革500年——社会史の視点から」⁽⁴⁾などが代表的なものである。こうした500周年を機に宗教改革を見直そうという動きのほかに、その見直し作業そのものの意味を考えようとする動きも見られた⁽⁵⁾。そのなかでも特筆すべきは、踊共二の手による「創られたドイツ宗教改革現代史的考察」であり、氏も本報告で紹介する3つの特別展に注目している⁽⁶⁾。筆者の本報告は、その二番煎じの感が否めないが、もう一つの基礎情報として提供していきたい。

1 「ルター 2017 (Luther 2017)」機構と「ルター 10 年 (Lutherdekade)」

右のロゴ(図2)を日本でご覧になった方がどれぐらいいるだろうか。このロゴは、EKDが宗教改革500周年記念を推進するために立ち上げた「ルター 2017」機構⁽⁸⁾により、2008年より使用されている。ドイツに限定されず、さまざまな国で「宗教改革500周年記念」を推進すると認められた、非営利のイベントや場所に掲げられた。筆者が日本で目にした例としては、2017年大阪の国立国際美術館で開催された「クラナハ 500年後の誘惑」展(2017年1月28日~4月16日)⁽⁹⁾の会場を出てすぐの廊下部分で行われていた、宗教改革にかかるパネル展示を挙げることができる。また、日本では、日本福音ルーテル教会が窓口となり、ウェブサイトが立ち上げられた。そこには今も、このロゴのバーナーを掲げた教会の写真が数多く掲載されている⁽¹⁰⁾。このロゴの広がり、今でもなお宗教改革が世界に与えた影響の大きさを物語っている。



図2

この機構は、2007年に宗教改革500周年記念祭の準備のために、EKDに加えて、連邦政府と諸州がそれぞれの責任を果たしながら十分な成果を生み出し協力できるように、共通の活動組織として設立されたものである。機構長にはその時々EKDのトップが就任するが、機構そのものには、国レベルでは文化・メディア連邦政府委員が、州レベルで

は、ザクセン州、ザクセン＝アンハルト州、テューリンゲン州、ブランデンブルク州、ラインラント＝ファルツ州、ヘッセン州、バイエルン州が参画している。加えて、国籍を問わず集められた学識者顧問による助言を仰ぎ、超宗派的で、文化国家ドイツにふさわしい記念事業の基本構想、ならびにこれを実現するための組織の在り方についての指針を示す役割を担った⁽¹¹⁾。

ここで注目すべきは、連邦政府の積極的な関与である。連邦政府は、早い段階で「連邦政府と 2017 年宗教改革記念祭」という文書を公表し、2017 年の宗教改革記念事業に対する姿勢を明らかにしている。それによると、財政面で連邦政府は、事業準備のために 2017 年まで毎年 500 万ユーロ（1 ユーロ＝135 円換算で 6 億 7500 万円）の支援を約束している⁽¹²⁾。実際、事業にかかった公的支出の試算を行ったフレルクによれば、2008 年から 2017 年に「ルター 10 年」（詳細は後述）に連邦政府が支出した税金は約 5000 万ユーロ（同換算で 61 億円程度）であり、同期間に行われた諸々の関連事業に政府と州が支出した公的資金の総計は 2 億 5500 万ユーロ（同換算で 345 億円程度）であったとされる⁽¹³⁾。こうした点から、当該事業への政府や州の支援は、主催者欄や後援者欄に形だけ名を連ねるという範囲をはるかに越えたものであったと判断することができる。

こうした機構により進められたプロジェクトの特筆すべき点は、クライマックスの 2017 年のみに集中するのではなく、2008 年から 2016 年までを助走期間とし、この間の準備を担う機関として「ルター 10 年 Lutherdekade」と呼ばれるプロジェクト組織を立ち上げた点である。「ルター 10 年」は、この間、展覧会やコンサートなどのさまざまな催しや、宗教改革の舞台を巡る旅の企画・提案などを行った。その際、各自治体や機関が無秩序に準備や企画を進めることのないよう、毎年テーマを設定し、プロジェクトの一貫性を担保した。しかもその決定にあたっては、宗教改革にかかるテーマの広がりや多様性に鑑みるだけでなく、キール大学神学教授ヨハネス・シリングを長とし、ハインツ・シリングやスーザン・カラント＝ナンら近世史家を含む 13 名を擁した「2017 年宗教改革記念祭のための学術顧問会」によって作成された「2017 年宗教改革記念祭のための展望」⁽¹⁴⁾という文書を手掛かりにし、学問的な裏付けも得ていた。

各年のテーマは、右の表の通りである。もちろんルターや彼の思想と関連付けられたテーマもある。万人祭司説を唱え、カトリックという巨大な権力に立ち向かったルターのイメージは、2011 年や 2014 年のテーマに繋がる。会衆歌としての讃美歌を広めたルターの功績は、2012 年のテーマを想起させる。しかしなが

表 「ルター 10 年」の毎年のテーマ⁽¹⁵⁾

年	テーマ
2008	宗教改革の幕開け
2009	宗教改革と信仰告白
2010	宗教改革と教育
2011	宗教改革と自由
2012	宗教改革と音楽
2013	宗教改革と寛容
2014	宗教改革と政治
2015	宗教改革——絵画と聖書
2016	宗教改革と一つの世界

ら、テーマ設定には、ルター以外の人物との関わりも考慮に入れられた。たとえば、2010年は、「ドイツの教師」といわれた、ルターの盟友フィリップ・メランヒトンの没後450年にあたり、2015年は、ヴィッテンベルクを本拠に活躍した画家ルカス・クラナハ(子)の生誕500年にあたる。それ以外でも、2009年は、カルヴァンの生誕500年にあたり、彼の教会理解や経済倫理に焦点が当てられている。ルターに限定されない「複数形の宗教改革」が意識され、エキュメニカルな対話への道が開かれていた。

こうした性格がさらに強く感じられるのが、2013年と2016年である。とりわけ2013年は、ヨーロッパのルター派と改革派の多くが参画した「ロイエンベルク一致協約」締結(1973年)から40年、対抗宗教改革の動きの一つであるトリエント公会議終了後、そして改革派の「ハイデルベルク信仰告白」の定式化(ともに1563年)から450年を数える。その年に、「ルター10年」は、宗教改革記念祭を実施するにあたり現代社会において「国境も宗派の境もないエキュメニカルな一致」を目指すことを「寛容」というテーマに託したのある。その際、ルターの反ユダヤ主義に代表される、宗教改革の不寛容な側面をも表にし、真に寛容な社会の実現を目指す、今日のドイツの姿勢を明示している。

以上のように、2017年の宗教改革記念祭と「ルター10年」プロジェクトは、連邦政府が深く関与し、州、教会、学識者たちが総動員で取り組んだ「チーム・ドイツ」による国家プロジェクトとでもいえるものだった。そこで「宗教改革を記念すること」に託された意図は、上に見たように、運営上示された方針や手法によりある程度理解できる。それでは、その意図は、一般市民に対して具体的にどのように示されたのだろうか。

2 ローカル・エキシビション～2016年テューリンゲン州～

「ルター2017」機構に参画した州の中でも核となったのは、ザクセン州、ザクセン＝アンハルト州、テューリンゲン州であった。とりわけザクセン＝アンハルト州はヴィッテンベルクに事務所を置き、宗教改革やルターに関する情報、記念事業にかかわる情報を一元的に管理・発信するセンターとしての役割を担った。クライマックスの2017年には、ナショナル・エキシビションの一つ「ルター! 95の財宝と95人の人びと」展も主催している。このように、公的機関の中で、連邦政府と並んで重要な役割を果たしたのが、州政府であった。

ここでは、クライマックス前年の2016年にテューリンゲン州で開催された、翌年のナショナル・エキシビションのミニチュア版ともいえる Landesausstellung(州主催の展覧会、ローカル・エキシビション)を取り上げたい。テューリンゲン州には、宗教改革関連史跡が多数散在している。たとえば、ルターが新約聖書のドイツ語訳を行ったヴァルトブ

ルク（アイゼナハ）や、大学教育を受けたエアフルト、巡回説教で訪れたイエナなどを挙げることができる。そうした地で、ザクセンからテューリングェンを本拠とし小領邦に分立しながらも 400 年もの長きにわたり命脈を保ち、現在でもベルギーやイギリスの王室に連なる家門を取り上げた「エルネスティン家 ヨーロッパをかたちづくった王朝（Die Ernestiner. Eine Dynastie prägt Europa）」展（2016 年 4 月 24 日～8 月 28 日）が開催された。「ルター 10 年」の 2016 年版チラシにも大きく紹介された展覧会である。なお、筆者は 2016 年 8 月にこの展覧会を訪れる機会を得た。

この展覧会は、エルネスティン家がかつて居城をおいたヴァイマルとゴータの 2 都市 4 会場にわたって開催された。一つ一つの会場で展示内容は完結しているが、すべてを見て回ることが期待された。そのための仕掛けとして、共通券があるのはもちろん、各会場の見取り図案内以外はパンフレットも図録⁽¹⁶⁾も共通で作成され、展覧会鑑賞後両市にある同家の史跡を散策できるように「街の中のエルネスティン家 ゴータ・ヴァイマル散策案内」（図 3）も配布されていた。こうした運営方式は、観光振興も含んだ「ルター 2017」機構の意図にかなった工夫であったと言える。さらに、こうした手法は、同年にアメリカのニューヨーク、ミネアポリス、アトランタではほぼ同時期に開催された 3 つの展覧会でもとられた。ルターの生涯と功績を伝えるという点では、3 つの展覧会のテーマは共通していたが、いわゆる巡回展ではなく、それぞれが独立した展覧会で相互に補完しあい、すべてを見るとよりよく主題を理解できるという仕掛けになっていた⁽¹⁷⁾。このやり方は、3 章でみるナショナル・エキシビションにも踏襲されていく。

会場ごとのテーマを確認していくと、ヴァイマルでは、新博物館で「①エルネスティン家と帝国」「②エルネスティン家と信仰」「③エルネスティン家と学問」にかかる展示がなされた。ヴァイマル市城では、常設展とともに「晴れ舞台としての居城」というテーマの展示を見学することができ、ルターが政治的な説教を行い、その思想が領邦の宗教となっていく様子が理解できるようになっていた。加えて、カタログの記述によると、大広間で



図 3 「エルネスティン家」展の共通券（右下）、パンフレット（右上）、散策案内（左）（筆者撮影）



図 4 ゴータのフリーデンシュタイン城（絵葉書より）

の玉座の演出が、ウィーン会議でなされた憲法制定の約束を実行した、カール・アウグスト大公による1816年の憲法公布を思い出させる役割を担った⁽¹⁸⁾。他方、ゴータでは、フリーデンスシュタイン城で「④エルネスティン家と家族」「⑤エルネスティン家と所領」が、ゴータ公博物館で「⑥エルネスティン家と芸術」がテーマとして取り上げられた⁽¹⁹⁾。

個々の展示は基本的には編年で行われ、6つのテーマを辿り終わると、ザクセン選帝侯フリードリヒ2世(在位1428-1464年)の二人の息子が1485年に領土分割を決めたことにより、兄エルンスト(選帝侯位1464-1486年)の流れを汲む家系として成立したエルネスティン家の歴史を、1918年のドイツ帝国崩壊により君主としての地位を失うまで見通し、その功績を理解できるようになっていた。同家は、16世紀半ばミュールベルクの戦いで神聖ローマ皇帝に敗れ、選帝侯位とその所領を失った。その結果、中部ドイツの限られた地域に支配域を限定され、その後も分家を繰り返し弱小領邦の君主としての地位に甘んじた。しかしながら、展示は、そうした困難な状況にも押しつぶされず、歴史を紡いできたエルネスティン家の力強さを感じさせるものであった。

そうしたなか、注目すべき要素として3つの点を挙げることができる。まず一つ目は、宗教改革の擁護者としての姿である。エルンストの長男、ザクセン選帝侯フリードリヒ3世(在位1486-1525年)が帝国追放刑を受けたルターをヴァルトブルク城に匿ったその人であり、彼の甥のヨハン・フリードリヒ1世(選帝侯位1532-1547年)がシュマルカルデン同盟を主導した人物であったことは、あまりにも有名な歴史的事実である。そのことを再確認させるような展示(1536年のシュマルカルデン同盟延長契約書⁽²⁰⁾(①)、複数のヨハン・フリードリヒ1世の肖像画⁽²¹⁾(①)など)とともに、1555年ごろにゼーガー・ボンバクによって製作された「ルターの絨毯」⁽²²⁾(②)や1887年に日本で撮影された日本人信徒たちとドイツ人宣教師たちの写真⁽²³⁾(②)が目をひいた。前者は、縦170cm×幅590cmにもおよぶタペストリーで、カトリックに対する「真の信仰」の勝利と、本当の姿を隠して近づいてくる「間違った信仰」への警戒を描いており、ルターの教えを端的に人びとに伝えている。また、後者に写る全ドイツ福音主義プロテスタント宣教団をときの当主カール・アウグストが支援していたことから、同家が宗教改革当初だけでなく19世紀においても、領民やヨーロッパにおいてのみならず世界に対してもプロテスタントの擁護者であったことを伝えている。

二つ目は、文化や学問の推進者・擁護者としての姿である。③⑥が中心であるが、いずれの展示においても、当家が蒐集した国内外の絵画や工芸品が見られる。そこから体系化された一つの特徴を見出すことは困難だが、当時の最先端技術を凝縮した陶器や金細工、さらにはヤギの骨格標本⁽²⁴⁾や天体望遠鏡⁽²⁵⁾などの展示から、学問振興に尽力した家門であったことは容易にわかる。ゲーテやシラー、フランスの百科全書派たちとの交流を示す展示は、文学や哲学など人文科学の分野にも造詣が深かったことを示す。また、クラナ

ハに代表される絵画にとどまらず、譜面⁽²⁶⁾や舞台装置⁽²⁷⁾などの展示により、音楽・舞台芸術などを含む幅広い芸術振興の軌跡を追うことができる。多岐にわたるこれらの展示内容から、文化的に「多様であること」、未知なるもの・異なる文化や知への許容度の高さの重要性を考えさせられた⁽²⁸⁾。

三つ目は、17 世紀以降神聖ローマ帝国内で政治的な力を失っていたはずのエルネスティン家が、まさに展覧会のサブタイトルにある通り「ヨーロッパをかたちづくる王朝」であった点である。すでに見たように、同家は思想面でも文化面でもヨーロッパの土台作りに貢献してきたわけであるが、より強くヨーロッパを作ってきたことを印象付ける展示が、④の最後に配置されていた。それは、1894 年にザクセン＝コーブルク＝ゴータ公女ヴィクトリア・メリタの結婚式を機に、コーブルクで撮影された親族の集合写真⁽²⁹⁾である。そこには、イギリスのヴィクトリア女王、その娘ヴィクトリア（ドイツ皇帝フリードリヒ 3 世の未亡人）、女王の孫でドイツ皇帝のヴィルヘルム 2 世、同じく女王の孫でヘッセン＝ダルムシュタット公女アレクサンドラとその夫でロシア皇帝のニコライ 2 世が写っている。まさに 19 世紀末のヨーロッパ権力の縮図であり、エルネスティン家がヨーロッパの縮図であると感じさせるに十分な展示物であった。

ただ、そこにはもう一つのメッセージを読み解くこともできよう。それは、国の境は越えうるものであり、ひとつのヨーロッパ、ひとつの世界も夢ではないということである。もちろん、この写真のように一つの家が勢力を持つというのは望ましくない。そこで意味をもつのが、二つ目の要素ある。つまり、「多様であること」の重要性である。この展覧会は、グローバリゼーションと多様性の尊重が車の両輪となって歩んでいく、という現代社会の課題をとともに考えさせるものだったのである。

「エルネスティン家」展は、タイトルだけ見ると、「ルター 10 年」が 2016 年に託した「宗教改革と一つの世界」とは程遠いように感じられる。しかしながら、これまで見てきたように、この州主催の展覧会も、「ルター 2017」機構の打ち出した宗教改革記念祭に託した要素「宗教改革」「多様性の尊重」「超宗派・超国境・世界性」に十分応えるものであり、2016 年のテーマに沿うものだったのである。

3 クライマックスとしてのナショナル・エキシビション

「はじめに」で記したように、宗教改革 500 周年記念のクライマックスに際して、3 つで一つの特別展が開催された。概要を確認しておく、①特別展「ルターとドイツ人 それぞれの時代はいかにして自分たちのルター像を築いてきたか（Luther und die Deutschen. Wie jede Epoche ihr eigenes Lutherbild prägte）」（2017 年 5 月 4 日～11 月 5 日）

が世界遺産ヴァルトブルク城で、②特別展「ルター！95の財宝と95人の人びと（Luther! 95 Schätze-95 Menschen）」（2017年5月13日～11月5日）がヴィッテンベルクのルターハウス（元アウグスティヌス隠修士会の建物）で、③特別展「ルターエフェクト 世界に広がったプロテスタントの500年（Der Luther Effekt. 500 Jahre Protestantismus in der Welt）」（2017年4月12日～11月5日）がベルリンの中心部にあるマルティン・グロピウス・パウという瀟洒な建物で開催された。

3つの特別展に共通のロゴとして採用されたのは、「宗教改革のフルパワー 3本のハンマー」と書かれたパンフレット（図5）にあるように、ハンマーであった。ルターとハンマーを結びつけるイメージは、早くはホルバインの「ドイツのヘラクレス ルター」（1522年、①）⁽³⁰⁾に遡ることができる。だが、「95か条の提題」の掲出とハンマーの結びつきが定着したのには、19世紀にフェルディナンド・パウエルが描いた「ルターによる「95か条の提題」の掲出」（1872年、①）⁽³¹⁾によるところが大きい。歴史的事実としての真偽は今も続く学術論争に委ねるにせよ、この物語が伝承と絵画イメージによって近代に増幅され、ハンマーがルターの宗教改革を記念するにふさわしいロゴとして選ばれたのである⁽³²⁾。

3本のハンマーはどの順で回るのがよいのだろうか。図6は、3か所の位置関係がわかるように示された、パンフレットの周遊図であるが、お勧めの順番は記されていない。どう回ろうと構わない。3つの特別展をすべて見てまわるもよし、一つだけを見て周辺の宗教改革関連史跡をめぐるもよし。いずれにしろ、特別展をきっかけに宗教改革の意義を再認識し、ドイツの広範な地域で観光振興に資すればよし、という主催者側の意図が見え隠れしている。それぞれの展覧会の焦点に着目すれば、ルター、ドイツ人、世界と視野が広がるよう、②①③と回るのが妥当のように思われる。しかし、ここでは、②③の方向性の類似性に着目し、①②③と回ることになろう。



図5 パンフレット（右）

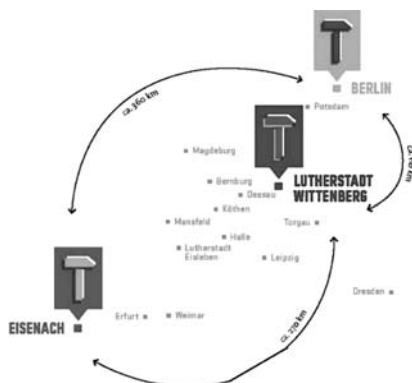


図6 周遊図（左：パンフレットより）

（1）ヴァルトブルクの特別展「ルターとドイツ人」

宗教改革 500 周年記念祭は、ドイツ人が自らのアイデンティティの核をなす集合的記憶を見つめなおす絶好の機会であった。そのためにも、宗教改革にとって重要な「記憶の場」であるヴァルトブルク⁽³³⁾は格好の場所であった。そこで、来場者たちは、時代背景としての中世後期から、ルターや宗教改革が巧みに自由主義やナショナリズムに取り込まれていった近代までの歴史に向き合うことになった。

そもそも来場者たちがたつヴァルトブルク城自体も、ルターの匿われていたころの様子とは全く異なり、19 世紀後半にザクセン=ヴァイマル=アイゼナハ公カール・アレクサンダーの大修復によって「創られた」古城である。そのなかでルターが悪魔にインク壺を投げたという逸話の舞台となった部屋も整えられたのである⁽³⁴⁾。来場者はその部屋の見学と同時に、そのイメージを再生産したユリウス・ヒュプナーの銅版画（1850 年）⁽³⁵⁾や、ルターと異なる急進的な宗教改革者であったミュンツァーを悪魔に見立てて同様の場面を描いた、ルッツ・ルドルフ・ケッチャーの絵画（1974 年）⁽³⁶⁾を鑑賞することにより、自らのもつルター像に対して疑問を抱くようになる。

パウル・トゥーマンの描く「聖書を翻訳するルター」（1872 年）⁽³⁷⁾では、羽ペンを持つルターが「国語の創造者」として人びとの目に映る。ハンマーの説明で紹介した図像に加えて、同じくトゥーマンの描いた「教皇の破門状を焼くルター」（1872 年）⁽³⁸⁾は、宗教改革 300 周年を機に同地で行われた、自由主義を求める学生運動ヴァルトブルク祭でナポレオン法典や保守的な書物が焼かれた事件の光景と重なり、「権威と戦う者ルター」のイメージを人びとに植え付けた。マックス・ヴルフの「ドイツのオークの木の下で」（1917 年）⁽³⁹⁾では、ルターが国民的英雄としてビスマルクと並んで描かれている。

こうしたナショナル・ヒーローとしてのイメージばかりではなく、マイナスのイメージも提示されている。先述のケッチャーのイメージは、農民の味方であったミュンツァーを悪魔に見立てていることから、農民の敵としてのルターのイメージがうかがえる。また、ヴィッテンベルクのマリーエン市教会の外壁にある「ユダヤ人の豚」のレプリカ⁽⁴⁰⁾も展示され、ユダヤ人の敵としてのルターを想起させる。こうした多様なルター像について、本展覧会にも足を運んだ踊はカタログにある言葉を借りながら、これらは、その時々ドイツ人が抱えていた希望、不安、理想がルターに投影した結果であり、ルターはドイツ人の鏡であり、ドイツ人の自己像であったと述べている⁽⁴¹⁾。

なるほど、自己像のマイナス面を受け入れるのは必ずしも容易なことではない。展覧会全体の印象が 19 世紀の「創られたルター像」に引きずられている感も否めない。それでも、鏡としてのルターへの気づきは、19 世紀から 20 世紀の政治情勢にルターや宗教改革についての理解が翻弄されてきたことを認めることに通じる。数少ないマイナスイメージの提示とともに、来場者たちの意識をナショナルな思考から脱却させるきっかけとなった

ことを祈りたい。

最後に、筆者の印象に残った展示物を紹介して節を終えたい。それは、作者不詳の「三者の宗教和平」(1600-1625年ごろ)⁽⁴²⁾である。三十年戦争との関わりで展示されたようだが、中央の大きな丸テーブルを教皇・カルヴァン、ルターが囲んでいる。カタログに付されたタイトルには「和平が諸教会に寛容を強く促す」とあり、この展覧会でも「ルター2017」機構で念頭に置かれていた「超宗派」「寛容・共生」という理念が忘れ去られていなかったと信じたい。

(2) ヴィッテンベルクの特別展「ルター！95の財宝と95人の人びと」(図9)

筆者がヴィッテンベルクを訪れた2017年9月は、町中がお祭りムードに包まれていた。かつては閑散としていたドイツ鉄道の駅舎を出ると、街全体を会場とした「世界エキシビジョン 宗教改革 自由への門」というイベントの案内ブースが設けられ、伏見稲荷の鳥居のように配置された門が人びとを旧市内へと誘っていった。城教会やマリーエン市教会(図7)などの史跡のほかに、「360°パノラマ」という1517年当時の世界を追体験できる現代的な催し(図8)も、観光客たちを楽しませていた。

そうしたなか、ルターハウスで行われていたのが、②の特別展である。この特別展は、ルターに焦点を当てたものであるが、その視野の広さは①の特別展をはるかに凌ぐものであり、3つの特別展のなかで、来場者たちがもっとも主体的に考えながら見て回らなければならない展覧会であった。

前半は、ルターの生涯と宗教改革にかかわる95の品々が展示されていた。あとから考えればさまざまな側面からルターをルターたらしめたものが選ばれていたのであるが、なかには一見しただけではいったい何の関係があるのかわからないものもあった。ライブツイヒ版「95か条の提題」⁽⁴³⁾や「贖宥状」⁽⁴⁴⁾などは非常にわかりやすく、ルターが城教会の扉に「95か条の提題」を貼り出した証拠として近年注目されている、レーラーの書き込みの入った「ルター訳新約聖書」⁽⁴⁵⁾などは、なるほど「Schätz(お宝)」と呼ぶにふさわしいものであった。ところが、2本の「動物の小さな骨」⁽⁴⁶⁾が展示されているブースの前では、どう理解していいものやら全く分からなかった。結果的には、その骨がルターの両親の家から出土されたものであり、スープのだしを取るのに使われたと考えられ、ルターの肉体をなしたものとして展示されていた。

だが、後半の展示は、これ以上に頭を悩ましながら見学することになった。後半は、ルターと関わりの深い人物と、ルターや宗教改革と「何らかの」関わりを見出すことのできる人びとの写真パネルとそのゆかりの品々が展示されていた。選ばれた95人の人びとは、脈絡なく配置され、見るものがルターとの関わりとそこに託されたメッセージを読み解き、「宗教改革」の意味を考えるように企画されていた。

わかりやすい例としては、宗教改革と直接的な関わりのあるデューラーやヘンリー 8 世、ドイツ文化の土台を築いたバッハ、ゲーテ、哲学者モーゼズ・メンデルスゾーン、孫で作曲家のフェリックス・メンデルスゾーンらを挙げることができる。変わりどころとしては、ルターの改革精神を引き継いだ人物としてスティーヴ・ジョブズも選ばれていた。ナショナリズムやナチズムとの関わりでは、ヴィッテンベルク城教会の修復工事に取り組み、新旧教問わず国民に配慮しドイツの国民統合を推し進めたドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世⁽⁴⁷⁾、ルターから反ユダヤ主義思想を引き継いだと公言していた、ジャーナリストでありナチスの政治家であったユリウス・シュトライヒャー⁽⁴⁸⁾らを挙げることができる。ここまでの事例はドイツ色が強いが、これからの事例では選択の幅はもっと広がる。

フランスで改革派として迫害され牢獄の壁に「抵抗せよ」と刻んで亡くなったマリー・デュラン⁽⁴⁹⁾、ナチズムに反抗し強制収容所で処刑された神学者ディートリヒ・ボンヘッファー⁽⁵⁰⁾、白バラ運動でナチスに抗したゾフィー・ショル⁽⁵¹⁾、アメリカ公民権運動のキング牧師⁽⁵²⁾、アメリカ政府による国民の監視と情報収集の不当性を告発したエドワード・スノーデン⁽⁵³⁾など、時代・地域を問わず、ルターのように良心に従い抵抗運動を展開した人びとが選ばれている。

さらに、世界への広がりを感じさせる人選が行われている。ムガル帝国のイスラーム思想家で「信仰のみ」の救済を説いたサイード・アフマド・カーン⁽⁵⁴⁾、19 世紀後半反帝国主義を唱えイスラーム社会の近代化に尽力したイスラーム改革者アフガーニー⁽⁵⁵⁾らが選ばれていた。これは、他宗教の改革運動・近代化への影響が意識されての人選であろう。ただ、彼らのモデルとしてルターが位置付けられているのには、やや違和感があった。ここまでのところ、筆者は世界史の知識を総動員し、ようやく人選の意図を理解していた。しかし、難題はさらに続く。

そうしたなか、日本人の写真を目にしてほっとするのも束の間であった。「KAZOH KITAMORI（北森嘉蔵）」。「恥ずかしながら筆者は、彼の顔も名前も知らなかった。説明書きを頼りに説明すると、彼は、原爆投下の衝撃のなかで『神の痛みの神学』を発表し、その著作がドイツ語や英語にも翻訳され、世界でも高く評価されたルター派神学者であった⁽⁵⁶⁾。そのほかにも、初めて知る人物が並ぶ。タンザニア生まれでミッション活動に貢献したジョサイア・キビラ⁽⁵⁷⁾、アフリカ系女性宣教師パウリナ・ドゥナミニ⁽⁵⁸⁾などである。彼らは何者であるかを理解してはじめて、見学者たちは、宗教改革思想の世界への広がりを実感する。最後に、もうひとり目をひいたのは、2010 年にローマ教皇として初めてルター派と合同礼拝をおこなった、エキュメニズムの推進者である、教皇ベネディクト 16 世である。こうした人選から、見学者たちは、「非ヨーロッパ世界への関心の広がり」「他者との歩み寄り」といったメッセージを受け取ることになる。

この展覧会には、歴史好きの来場者たちが期待するような「お宝」は必ずしも多くなか



図7 ルカス・クラナハの祭壇前にできた人だかり (マリーエン市教会内) (筆者撮影)



図8 「Luther 1517. 360° パノラマ」内部の様子。手前は見学者たち。(筆者撮影)



図9 特別展②の入り口 (筆者撮影)



図10 特別展③の入り口 (筆者撮影)

った。考えずに見学してしまえば、写真パネルばかりでがっかりするようなセクションもあった。しかしながら、この展覧会では、そのセクションこそが圧巻であった。写真の人物と、それを選んだキュレーターたちと対話をしながら、否が応でも今日的な宗教改革の意味を考えさせられた。その結果、来場者たちは、ドイツに限定されたナショナルなものではなく、アフリカや極東までもを含んだグローバルな視点を共有し、イスラームやカトリックなどの他者との対話・彼らに対する尊重の姿勢が重要であるという印象を強く持つことになる。この点において、この展覧会はまさに「ルター2017」機構の意図を具現化した展覧会であった。

(3) ベルリンの特別展「ルターエフェクト」(図10)

この展覧会では、オーディオガイドならぬ iPad がガイド機として貸し出され、詳細な説明を聴きながら鑑賞できるようになっていた。聞き取りの不得意な外国人(筆者)には、画面に出てくる解説も大きな助けとなった。また、クイズや書き込み欄のある子ども用冊子(図11)も用意され、幅広い来場者に配慮がなされていた。



図 11 子ども用冊子の表紙

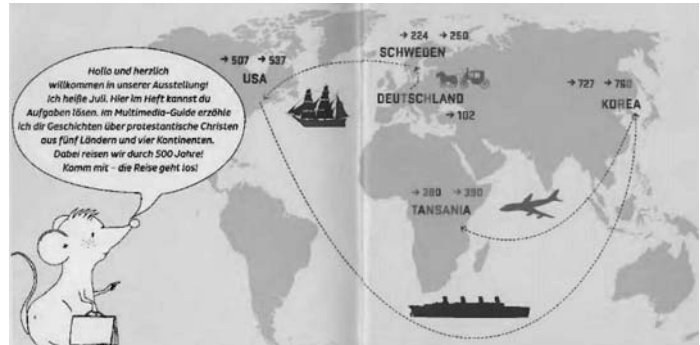


図 12 ネズミの世界修学旅行（図 11 の巻頭頁より）

この展覧会は、タイトルが示す通り、宗教改革の世界への影響がわかるよう、四大陸に渡り 500 年のときをかけて、世界旅行・時間旅行へ誘われる仕立てになっていた。具体的には「プロテスタントが他の宗派や宗教にどのような爪痕を残したのか」「そのなかで、プロテスタント自体がどのように変わってきたのか」「人びとが福音主義の教義をどのように身に着け、形作り、実践してきたのか」という観点から企画されていた。1500 年頃から現在に至るまでの世界に広がる影響と相互作用の歴史が語られていた。展覧会の構成としては、「1450 年から 1600 年のドイツ」「1500 年から 1750 年のスウェーデン」「1600 年から 1900 年の北アメリカ」「1850 年から 2000 年の韓国」「今日のタンザニア」と、時間が下るにつれて地球規模で世界に広がっていく「ルターの波及効果」が追体験できるようになっていた。（図 12 も参照のこと）

この展覧会では、最初のセクションから多様性の受容が全面に打ち出されていた。「複数形の宗教改革 die Reformationen/the Reformations」という学界の最近の動向も反映し、ルター派、改革派、イギリス国教会、カトリックなどの主要宗派だけでなく、公認宗派とは認められなかった少数派の再洗礼派も対等に扱っていた。教会空間を伝える展示でも、ルター派とカトリックが一つの教会をいっしょに利用している様子を描いた、マテウス・クロキウスの「バウツェンの聖ペテロ教会内部」（1644 年以降）⁽⁵⁹⁾が採用されていた。さらには、あまり取り上げられることのなかった宗教改革期の女性たちに着目する展示も用意されていた。

そのうえで、視点はヨーロッパ、さらには世界へと広がっていく。ヨーロッパのなかでスウェーデンが展示対象に選ばれたのは、北欧地域のルター派の拡大が顕著であり、その王が三十年戦争においてルター派の雄として権勢をふるったことを考えれば、当然のことと思われる。「グスタフ 2 世アドルフの神格化」（作者不詳・17 世紀）⁽⁶⁰⁾などの展示は、こうした歴史を踏まえたものである。しかしながら、注目されるのは、展示の多くを少数の北方先住民族サーミ人に割いていた点である。彼ら独自文化を紹介し、キリスト教との共生を強調していた⁽⁶¹⁾。もちろん歴史的事実としてゲルマン系の人びとによるサーミ人の

強引なキリスト教化を否定するものではない。ここで留意したいのは、マイノリティ文化の存在を尊重し多様性を重視する姿勢であり、これは最初のセクションの展示姿勢と共通するものであった。

こうした姿勢は、アメリカを扱ったセクションにも引き継がれる。アフリカ系住民やアメリカ先住民への配慮がなされていた。加えて「クウェーカーの教会会議」(1699)⁽⁶²⁾や、アフリカ系住民が賛美し踊る様子を描いた「黒人メソジスト教区の礼拝」(1810年)⁽⁶³⁾の展示のように、ヨーロッパでは必ずしも主流ではなかったグループへの配慮がなされていた。ただ、両義的にとれる展示もあった。アメリカ先住民がキリスト教の洗礼を受ける図⁽⁶⁴⁾や宣教団による彼らの洗礼簿⁽⁶⁵⁾である。これらは、宗教改革思想の広がりを表す展示ともとれるし、アメリカ先住民の文化を蹂躪したことへの反省のための展示ともとれる。それでも、ヨーロッパ中心主義の気配が残る展示であった。

この懸念は、展覧会後半にはいり強まっていく。アジア地域で展示対象として選ばれたのは、キリスト教徒が人口の3割を占める韓国である。展示には、ハングル訳聖書や、韓国の伝統的衣装を纏った人物で聖書の場面が描かれた連作(キム・キチャン、1952年)⁽⁶⁶⁾もあったが、もっとも目をひいたのはソウルのメガチャーチの礼拝の写真(2016年)⁽⁶⁷⁾である。これは、市内の教会の繁栄ぶりや若い信徒たちの盛んな活動ぶりを伝える展示とともに、このセクション全体がキリスト教の世界伝道の成功を誇示しているという印象を与えるに十分なものであった。

タンザニアのセクションでも、ミッション活動とともに「賛美するアフリカ人信徒たち」⁽⁶⁸⁾や「賛美するアフリカ人牧師」(ともに2017年)⁽⁶⁹⁾の様子を伝える写真が数多く展示されていた。結果として、ここでも宣教活動の成功が称揚されているように感じられた。加えて「アフリカ女性と印刷機」⁽⁷⁰⁾「アフリカの家事学校」⁽⁷¹⁾の写真(ともに1984年)などの展示は、キリスト教ヨーロッパ文化の世界への単なる「広がり」ではなく、さらに踏み込んで「貢献」と読み解くこともできる。こうした展示は、ルターの世界への影響を確認する展覧会であるので無理からぬことではあるが、かつての「文明化の使命」の延長線上にあるようにも感じられた。これは、筆者がアジア人だからであろうか。

後半にみたように、視点が非ヨーロッパ世界に向かうとき、ヨーロッパ中心主義的な視線は残る。しかしながら、先に指摘した、アメリカ先住民の洗礼図や洗礼簿のように、宗教改革を含めヨーロッパ的な価値の押し付けがもつ問題点を自認していると受け取れる展示もある。何より、展覧会全体のコンセプトが、多様性の尊重・寛容精神の希求であることは十分に理解できる。この点において、この展覧会も、「ルター2017」機構の打ち出した方針に沿うものであったと言える。

お わ り に

以上みてきたように、今やキリスト教国家というよりも、信仰を持たないという信条も含めて多宗教・多信条の国家となったドイツが、宗教改革 500 周年記念に込めた意味は明白である。なるほど、偉大なドイツ人としてルターを顕彰しようとするのを放棄したわけではない。しかしながら、300 周年以降ナショナリズムに彩られてきた宗教改革記念を「超宗派」「寛容」「多様性」「世界への視点・グローバリゼーション」といった新しいメッセージで重ね塗りしようと葛藤していたのも事実である。この壮大な試みは、現代ドイツの覚悟を示す格好の舞台であったのかもしれない。だからこそ、外国人にはいささか大仰に映るほど、「チーム・ドイツ」が一丸となって、10 年の歳月と多額の公費を費やしたのだろう。

もちろん、試みが成功に終わったと言えない点もある。ナショナル・エキシビションにも、ナショナリズム的な古いものの見方や、ヨーロッパ中心主義の呪縛から抜け切れていない点が見え隠れしていた。何より、新たな国民としているはずのイスラーム系の人びとの存在を感じることができなかった。しかしながら、こうした限界が、「ルター 2017」機構のプロジェクト「ルター 10 年」と宗教改革 500 周年記念事業に見られた、多様性や寛容の精神を尊重し希求する姿勢を否定するものではない。何をもって十分に伝えられていたと評価するのは難しい問題であるが、筆者には、少なくとも本報告で取り上げた展覧会が、一般の来場者たちに「チーム・ドイツ」が現代社会で重要であると考えた価値を伝えるのに、十分な努力と工夫を重ね、一定の役割を果たしたと思われる。

その価値を確認すべく、最後にヴィッテンベルクの宗教改革 500 周年祝賀式典でメルケル女史が述べた言葉で締めくくりたい。

「多様性を肯定する者は、寛容を実践しなければなりません。これは、私たちの大陸が歴史的に積み重ねてきたことです。ヨーロッパにおける平和的な共生の基盤が寛容にあるということを、私たちは大変な苦労をしながら学んできたのです。」⁽⁷²⁾

付記：本報告は、2016 年度佛教大学教育職員研修（海外研修）と 2017 年度佛教大学特別研究奨励費の研究成果の一部である。

キーワード：ドイツ宗教改革、宗教改革 500 周年記念祭、集合的記憶

〈注〉

（1）城教会の扉への掲出そのものの信憑性については長らく疑問を呈され、ある種の宗教改革伝承と認識されていた。（たとえば、永田諒一『宗教改革の真実』講談社現代新書、2004 年、16-20 頁。）ところが、

- 2006年マルティン・トロイによりレーラーの書き込みが再発見されたことにより、その真偽について論争が再燃した。詳しくは、踊共二「創られたドイツ宗教改革——現代史的考察」『武蔵大学人文学会雑誌』50-1 (2018年)、15-16頁。
- (2) Wartburg-Stiftung Eisenach (Hrsg.), *Luther und die Deutschen. Begleitband zur Nationalen Sonderausstellung auf der Wartburg 4. Mai - 5. November 2017*, Eisenach, 2017 (以下、*Wartburg*), S.404.
- (3) 「2017年度三田史学会大会シンポジウム報告」『史学 (三田史学会)』88-1 (2018年)、71-148頁。ここに、野々瀬浩司の緒言、森田安一、西川杉子、田上雅徳の講演内容が掲載されている。
- (4) 「特集 宗教改革500年——社会史の視点から」『思想』1122 (2017年10月)号 (2017年)、2-128頁。ここに、森田安一、岩倉依子、野々瀬浩司、渡邊伸、ユーク・ドシー、富田理恵、早川朝子、村上みかが論稿を寄せている。
- (5) たとえば、ドイツでは、宗教改革500周年記念事業を推進した「ルター2017」機構が事業内容をまとめた、*die Staatlichen Geschäftsstelle »Luther 2017« und die Geschäftsstelle der EKD »Luther 2017—500 Jahre Reformation«* (Hrsg.), *Reformationsjubiläum 2017. Rückblicke*, Leipzig 2018。また、歴史家たちが数々の関連イベントを寸評した特集として、'Reflections on Events that marked the Anniversary of the Reformation', in *the Sixteenth Century Journal* XLVIII-4 (2017), pp.977-1058。
- (6) 踊、前掲論文。展覧会を中心とした考察は、12-26頁。
- (7) „(Festakt am Reformationstag) Merkel: Ohne Religionsfreiheit nimmt die Gesellschaft Schaden“ (Frankfurter Allgemeine HP) (<http://www.faz.net/aktuell/politik/inland/angela-merkel-spricht-beim-festakt-zum-reformationstag-15271558.html>、最終閲覧日2018年4月27日)より。
- (8) 「ルター2017」機構のウェブサイト (<https://www.luther2017.de/de/index.html>) は、2018年12月をもって更新されていないが、現在も閲覧できる。この機構やプロジェクトについての邦語での紹介は、加納和寛「〈フォーラム〉ドイツにおいて宗教改革記念日はどのように祝われたのか：ドイツ福音主義教会の動きを中心に」『関西学院大学キリスト教徒文化研究』19 (2018年)、75-82頁。ここでは特に75-77頁。
- (9) この展覧会は、大阪展に先立ち2016年10月15日から2017年1月15日にかけて国立西洋美術館で東京展が行われている。
- (10) 「宗教改革500年」(<https://luther500.wixsite.com/jelc>)。
- (11) Die Bundesregierung und das Reformationsjubiläum 2017. Eine Positionsbeschreibung (<https://www.bundesregierung.de/resource/blob/997532/775142/16e761e45f33383c0265b4e16046acaf/2012-10-29-positionsbeschreibung-reformationsjubilaeum-data.pdf?download=1>), S.1.
- (12) Ibid., S.3.
- (13) Frerk, Carsten, Kosten der Lutherdekade 2008-2017 (<https://fowid.de/meldung/kosten-lutherdekade-2008-2017>).
- (14) Perspektiven für Reformationsjubiläum 2017 (https://www.luther2017.de/fileadmin/luther2017/material/Grundlagen/perspektiven_luther2017_de.pdf).
- (15) Luther2017のウェブサイトより作成。毎年のテーマに沿って行われるイベント情報などをまとめたJahrbuchは、<https://www.luther2017.de/archiv/materialien/jahrbuecher/index.html> でダウンロードすることができる。
- (16) Friedegund Freitag & Karin Kolb (Hrsg.), *Die Ernestiner. Eine Dynastie prägt Europa*, Drenden, 2016 (以下、*Die Ernestiner*)。
- (17) それぞれ「マルティン・ルター：芸術と宗教改革」展 (ミネアポリス、2016年10月30日～2017年1月15日)、「言葉とイメージ：マルティン・ルターの宗教改革」展 (ニューヨーク、2016年10月7日～2017年1月22日)、「法とめぐみ：マルティン・ルター、ルカス・クラナハと救いの約束」展 (アトラ

- ンタ、2016 年 10 月 11 日～2017 年 1 月 16 日）として独立しているが、全体としては「我ここに立つ（Luther Exhibitions USA 2016）」展。図録としては、*Martin Luther. Treasures of the Reformation*, Dresden, 2016。
- (18) *Die Ernestiner*, S.29.
- (19) テーマの前に付された数字は筆者による。以下、展示物の後ろに（ ）付きで示された数字は、どのテーマの会場で展示されたのかを示す。
- (20) *Ibid.*, S.107.
- (21) *Ibid.*, S.110-111.
- (22) *Ibid.*, S.186-187.
- (23) *Ibid.*, S.231.
- (24) *Ibid.*, S.323.
- (25) *Ibid.*, S.311 & 326.
- (26) *Ibid.*, S.377 & 379.
- (27) *Ibid.*, S.386.
- (28) エルネスティン家の王侯コレクションについては、細川裕史「(3 章) ゴータ 忘れ去られた名家の遺産」森貴史編著『ドイツ王侯コレクションの文化史 禁断の知とモノの世界』勉誠出版、2015 年、67-99 頁を参照のこと。
- (29) *Die Ernestiner*, S.52.
- (30) *Wartburg*, S.35.
- (31) *Ibid.*, S.318-319.
- (32) 伝承の真偽については、踊、前掲論文、15-16 頁。ハンマーのイメージに関しては、踊、前掲論文、3-4 頁。
- (33) 「記憶の場」としてのヴァルトブルクの歴史については、Etienne François, *Wartburg*, in: id. (Hrsg.), *Deutsche Erinnerungsorte: eine Auswahl*, München, 2005 を参照のこと。
- (34) この部屋は、ルターが新約聖書を訳した部屋として展示が整えられている。
- (35) *Wartburg*, S.316.
- (36) *Ibid.*, S.147.
- (37) *Ibid.*, S.322.
- (38) *Ibid.*, S.350.
- (39) *Ibid.*, S.64.
- (40) *Ibid.*, S.243.
- (41) 踊、前掲論文、14-15 頁。
- (42) *Wartburg*, S.107.
- (43) Stiftung Luthergedenkstätten in Sachsen-Anhalt (Hrsg.), *Luther! 95 Schätze – 95 Menschen*, Berlin, 2017, S.92-93.
- (44) *Ibid.*, S.84-85.
- (45) *Ibid.*, S.88-89.
- (46) *Ibid.*, S.160-161.
- (47) *Ibid.*, S.308-309.
- (48) *Ibid.*, S.478-479.
- (49) *Ibid.*, S.534-535.
- (50) *Ibid.*, S.430-431.

- (51) *Ibid.*, S.368-369.
- (52) *Ibid.*, S.314-315.
- (53) *Ibid.*, S.540-541.
- (54) *Ibid.*, S.550-551.
- (55) *Ibid.*, S.388-389.
- (56) *Ibid.*, S.504-505.
- (57) *Ibid.*, S.370-371.
- (58) *Ibid.*, S.332-333.
- (59) Deutsches Historisches Museum (Hrsg.), *Der Luther Effekt. 500 Jahre Protestantismus in der Welt*, Berlin 2017, S.63.
- (60) *Ibid.*, S.129.
- (61) *Ibid.*, S.86-97.
- (62) *Ibid.*, S.187.
- (63) *Ibid.*, S.234.
- (64) *Ibid.*, S.214.
- (65) *Ibid.*, S.215.
- (66) *Ibid.*, S.294-313.
- (67) *Ibid.*, S.314.
- (68) *Ibid.*, S.379.
- (69) *Ibid.*, S.385.
- (70) *Ibid.*, S.351.
- (71) *Ibid.*, S.357.
- (72) 註7。